

女装から始まる恋物語

あまみすず

「に、似合わないよやっぱり、こんなの……」

鈴奈に渡された服を身につけて、僕は鈴奈の部屋にあった大きな姿見の前で困惑していた。

「ぐはあっ！ こ、これは、予想以上の破壊力ね……我ながら自分の才能が恐ろしくなるわ」

僕の後ろで変な声をあげつつ、鈴奈は僕の姿をいろいろな角度から舐め回すように見始めた。彼女の動きに合わせてポニーテールがゆらゆらと揺れる。

鈴奈に見られるなんて顔から火が出かねないほど恥ずかしかったけれど、勝手に動くと鈴奈から「今、魂のハードディスクに焼き付けてるから動いちやダメ！」と注意されてしまうから動けない。うう、早く終わってほしい、恥ずかしい……。

今、僕が着ているのは女性ものの服だ。細身の白いTシャツに、襟元にフリルをあしらった薄い桃色のブラウスを合わせ、素材はよく分からないけど肌触りのいい無地のフレアスカートを穿いている。気のせいかもしれない。普段、鈴奈が着ている服だとしたら、もしかしたらこれは鈴奈の香りなのかも……そう考えるとドキッとす。

でも、僕はれっきとした男なのだ。

つまり、今僕がやっていることは女装だった。

本当は女装なんてしたくない。特に股の辺りがスースーしてて落ち着かない。でも、鈴奈に押し切られる形で僕は女物の服を着せられるハメになっていた。

「うんうん。似合わないなんてとんでもない。今のゆ一君はどう見ても女の子にしか見えないよ。ふおおお、やっぱりゆ一君可愛すぎるよー！ うきゃー!!」

「や、やめて鈴奈、抱きつかないで！」

がぼっと僕の首に抱きついたかと思ったらすぐ離れて、きゃーきゃーと僕の周りで腕をぶんぶん振り回して悶え始める鈴奈。幼なじみとはいえ、ただでさえこんな格好をさせられて普段より落ち着かないのに今みたいなことはやめてほしい。うう、色々恥ずかしくて死んじゃいそう。

ちなみにゆ一君という鈴奈の呼び方は、僕の名前が優希だからだ。真壁優希、なんだか女の子みたいな名前だっていつも思ってる。ただでさえ女顔で、女の子みたいだって言われることがあるのに。

と、鈴奈が目をキラキラさせながら僕の隣に並んで立った。そして鏡の中の僕をじっと見つめる。

「でも、うーん。確かに今でも十分完璧な男の娘なんだけど、何か決め手に欠けるんだよねー」

鏡に映る鈴奈は真剣な表情で悩んでいる。この真剣さを勉強に生かしたほうがいいと思うけど……。

幼なじみのひいき目があるかもしれないけど、鈴奈は可愛い女の子だと思う。僕みたいな女装した男子（鈴奈に言わせると男の娘、と呼ぶらしい）より当たり前だけど女の子として魅力的だ。

「あ、分かった！ 頭に飾り物がないじゃない！ ヘアピン……は、似合わないから、リボンがぐーだね。可愛いを探してくるからそのまま待ってて！」

叫ぶと、鈴奈はばたばたと机の棚を手当たり次第に開け始めた。思いついたらすぐ行動に出るところは昔からずっと変わっていない。人懐っこく明るい笑顔もそのままだ。

女装はもちろん恥ずかしい。それでも、僕が鈴奈の要求に折れてしまうのは、鈴奈の笑顔が見られるからかもしれない。鈴奈の笑顔は僕を安心させてくれる。……目を異様に輝かせながら頬を紅潮させる危ない笑顔は、少し困るけど。

学校で一人にしている時の鈴奈は、どこか物憂げな表情で寂しそうにしていることがある。持ち前の明るい性格で誰とでも気兼ねなく話せる女の子だから、何か悩み事があるのかと心配になった。でも、僕の前ではそんな顔をしないし、聞いても「気のせいだよ！」とはぐらかされた。

本当のことは分からないけど、何か悩んでいるならちゃんと話してもらえれば嬉しい。僕はそう思っている。

「って、鈴奈？」

気がつくと部屋の中がやけに静かになっていた。考え事をしている間に何かあったのだろうか、僕は鈴奈の方を振り返る。

鈴奈は机の小物入れの前で硬直したまま、何かを手に握っていた。それは……。

「なっ！ す、すずっ、な、なに持って……！」

彼女は恥ずかしそうに両腕を前に突き出して、持っていたものをぴろーんと広げてみせた。その……女の子の下着を。

「いやー、あはは……」

苦笑しながら、鈴奈は黒を基調とした下着を指先でもじもじといじっている。少し子供っぽいところがある鈴奈の下着にしては、かなり布地が少なかった。腰まわりの布地が特に少なく、紐に近いような形状になっている。

とてもじゃないけど直視してられなくて、僕は目を逸らしてしまう。なんであんなものを鈴奈が……。 「こ、これはね、い、いわゆる勝負ぱんつってやつですよ。少し前につい出来心で買っちゃったというか、その、あ、い、いつもこんなローライズのきわどいやつ穿いてるわけじゃないから、そ、そこ、勘違いしないように……」

盛大に主張すべき点を間違えながら、鈴奈はぼそぼそと呟く。

「そ、そういうわけだから、ゆー君。これ、穿いて」

「……え？」

僕の幼なじみは今、息を吸うようにとんでもないことを言わなかつただろうか。

再び鈴奈に視線を合わせると、彼女は胸のあたりできわどい下着を広げたまま僕のことを上目遣いに見た。

「だ、だから……このぱんつ、ゆー君が穿くの」

「な、なんで!? だ、だって、下着なんて外から見えないとこ、こだわっても仕方ないじゃないか」

それ以前に、そんなことをしたら僕は本物の変態だ。女装だけならまだ我慢できるけど、いや、すごく恥ずかしくて逃げ出したいけど、女の子の下着を穿くなんて越えちゃいけないハードルを三段くらい飛び越えちゃってる。そんなの無理だ！

我ながらしごく正当な主張をしたつもりだったけど、

「外から見えないからこそこだわるの！ こんなの女の子の常識だよ！」

なぜか鈴奈に顔を真っ赤にされて怒られた。恥ずかしいのは僕も一緒なのに理不尽だ。そもそも男の僕が女の子の常識とやらを知るはずがないじゃないか……。

どこかいたたまれない沈黙が少しだけ流れる。むー、と頬を膨らませていた鈴奈は、少ししゅんとした。そういう表情をするのは、ずるいと思う。

「もしかして、このぱんつ可愛くなかったかな、色っぽくなかったかな。結構、自信あったんだけどな」

「……そ、そんなことはないよ。その下着、可愛いと思う、うん」

「ちなみにこれ、まだ穿いてないやつだよ？」

「どうしてそこを強調するの!?!」

「あ、それとも穿いたことある方が良かったのかな？ ……ゆー君のむつつりスケベ」

「なんで僕が悪者扱いされてるの!?!」

僕がどうしても鈴奈の下着を穿く意思がないと分かったら、鈴奈はむむうーと頬を膨らませて、

「もー！ とにかくゆー君はこのぱんつを穿くの！ 可愛い女装をした男の娘は可愛い女の子のぱんつを穿かなきゃいけない義務があるの！ 宇宙の法則なの!! 観念しろー!!」

「そんな法則嫌だよー!!」

無理やり下着を穿かせようと鈴奈が襲ってきたので、僕は必死に逃げ回る羽目になった。

「はぁ」

自宅に帰ってから僕は大きいため息を吐いた。

結局、下着を穿かせられることだけはどうにか阻止した。というのも、鈴奈が僕の着ていたフレアスカートをめくり上げて下着を覗き込んだ途端、「きよ、今日のところはこれぐらいで許してあげる」とだけ言って顔を赤くしたまま黙りこくってしまったからだ。

たぶん、ギリギリのところできりすぎたことに気づいてくれたのだ。正直なところ、僕はあの時ほっとした。

自室に戻ってベッドに横になると、疲労感が肩のあたりにのしかかってくる。女装していた時に、緊張と恥ずかしさのせいで肩に変な力が入っていたのかもしれない。

「そもそも、あんな服さえ着なければ……」

僕はちらりと、部屋の上着かけに掛けてある一枚のジャケットに視線をやった。ベージュを基調とした全体的にかなり細身のシルエットで、本来なら女性が着るような服だ。でも僕は身体つきが細いから、普通の男性用の上着を着ると着膨れしているように見えてしまう。だから、敢えて女性用のものを選んで買ったことがあるのだ。

実はこの服が、僕を女装の世界に誘いこんだきっかけだった。

小学校の頃の僕と鈴奈は、比較的仲の良い幼なじみだったと思う。公園で暗くなるまで一緒に遊ぶこともあれば、鈴奈の家に行ったりしてゆったりした時間を過ごす……そんな間柄だったと思う。そして、中学に入ってからその関係は変化した。

学区が同じだったから同じ中学校に入ることは決まっていた。でも、最初のクラス分けで僕と鈴奈は違うクラスだった。

『クラスが違ってても大丈夫だよ！ 幼なじみなんだし、一緒にお昼食べたり登下校したり出来るって!』

鈴奈は明るく笑っていた。僕も鈴奈の言うことに頷いていた。この関係は変わらないままなのだと、心のどこかでぼんやりと考えていた。

しかし、新しい環境に慣れて新しい友人と出会って、新たな関係を消費していくのは思っていた以上に負担のかかることだった。僕はこの顔のおかげで親しみやすい印象があったのか、男女ともによく話しかけられた。友人と呼ぶべき間柄の人も何人かできた。皆、いい人達ばかりだったから居心地は悪くなかった。その分、鈴奈と過ごす時間は減っていった。

入学してから三ヶ月、僕と鈴奈は一緒に昼食をとることも登下校で一緒になることもなくなっていた。別に喧嘩をしたわけでもないのに不思議だった。ただなぜか、会って話すのがいたたまれなくなったのだ。自分でもよく分からないもやもやとした気持ちを抱えつつ、僕と鈴奈との微妙な関係は中学二年に上がるまで続いた。

学年が上がって、今度はクラスが一緒になった。久しぶりに見た幼なじみは、おさげにしていた髪をポニーテールにまとめてぐっと女の子らしくなっていた。窓際の席で頬杖をつきながら一人、物憂げな表情をしていた鈴奈はなんだか僕の知らない女の子になったみたいで、どきりとした。

『す、鈴奈。その、久しぶり』

それでも僕がぎこちなく声をかけると、鈴奈は淡くはにかんで見せてくれた。

『あ、ゆ一君だ。久しぶりだね』

それからは何となく一緒にいる時間を作ることができた。だけど、快活で口数も多かった鈴奈は自分か

ら口を開かなくなっていた。僕は元々あまり喋らない方だったから、必然的に会話がなくなることになる。たまに僕の方から話題を振っても、

『あ、うん。そうだね』

と曖昧な返事をされるばかりだった。

僕はある時、この関係を何とかしたい一心で、休日に鈴奈と一緒に買い物に出かけようと誘った。我ながら大胆な行動に出たと思ったけど、それ以上に鈴奈が僕の誘いに二つ返事でOKしてくれたことにびっくりした。

そして僕がその時に着ていったのが、件のベージュのジャケットだったのだ。会って開口一番に鈴奈が言い放った言葉は今でもよく覚えている。

『……ゆ一君、その格好、すごく可愛い。男物より女物の服の方がずっと似合うんじゃないかな』

邪気のない笑みのまま言われたのもあって、僕のプライドは大きく傷ついた。それだけではなく、鈴奈はさらに無茶なお願いをしてきた。

『ね、買い物終わったら久しぶりにわたしの家に来ない？ ゆ一君に似合いそうな可愛い服、合わせてみたいの！』

キラキラと目を輝かせた幼なじみのお願いを断りきれず、「一回だけだからね」と許してしまって——今に至るわけだ。一回だけ、というはずの口約束は鈴奈の更なるお願いで週に一回、木曜日の放課後だけという約束になっていて、なし崩しに僕は鈴奈の家で女装をすることになっていた。

そういった日々が始まってから二ヶ月。暑い夏がやってこようというこの季節に、僕は女物の下着を穿かされそうになっていた。

「最近、どんどん鈴奈の頼みが過激になってるなあ」

最初は下に穿くものもスカートじゃなくて細身のズボンだった。上に着るものは最初から完全に女物だったけど……。

スカートに下着、このままだと僕はとんでもない格好させられるんじゃないだろうか、そう思うと背筋がひやりとした。ひとまずは、次に鈴奈がさらに過激な要求をしないことを祈るしかない。

「そういえば……」

女装の件がきっかけで前よりは話すようになったけど、女装以外の話題は相変わらずしていない気がする。鈴奈が女装の話題で暴走するままに流されているからかもしれない。学校でも、もう少し気兼ねなく話せばいいと思う。

立ち上がって軽く伸びをすると、僕は明日の学校の準備を始めることにした。

翌日の昼休み。僕は鈴奈の席に近づいて後ろから声をかけた。

「鈴奈」

「ひゃい!？」

至って普通に声をかけたつもりだったが、鈴奈の声は裏返っていた。

「ご、ごめん、驚かせちゃったかな」

「そ、そうじゃない、けど」

ちらりと僕の方を振り返って、鈴奈は「むうー」とよく分からない声をあげた後、顔を真っ赤にして俯いてしまう。その様子を見ていて、僕も昨日のことを思い出して気恥ずかしくなってしまった。でも、ここで引く気は無かった。意を決して再度話しかけることにする。

「鈴奈、それで、今日の昼食なんだけど、よかったら」

「……日曜日」

「え？」

鈴奈はよく分からない返答をぼつりと呟く。そして僕の方を見ないまま、がたんと勢いよく立ち上がった。

「次の日曜日、一緒に出かける。集合はわたしの家、以上、おしまい」

「え、す、鈴奈？」

それだけ言い残すと、まるで僕の元から逃げるような早歩きで鈴奈は教室の外へと行ってしまった。一緒に昼食を、と言おうと思っていた僕は完全な不意打ちに硬直してしまった。

あんな姿、今まで一度も見たことがなかった。